

ラテンアメリカ時事解説 ―特集：リオ+20 とラテンアメリカ

リオ+20「日本パビリオン」に参加して

細野 昭雄

1992 年の「地球サミット」から 20 年にあたる 2012 年 6 月に開催された「国連持続可能な開発会議（リオプラス 20）」に際して、その本会議場「リオセントロ」の道路を挟んで向かい側にサイドイベント会場が設けられた。ここで、主要各国がそれぞれパビリオンを設け、その持続可能な開発に向けた取り組みを展示、かつセミナーなどを開催して発信した。

世界の持続可能な開発に向けた日本の貢献をアピールした日本パビリオン

日本パビリオンは、持続可能な開発に関する日本のポテンシャルと貢献を世界に示すことを目的として、政府、企業、自治体など官民協働の、まさにオールジャパンの出展によって行われた。特に、震災からの復興と強靱な社会づくり、日本の環境技術・グリーンイノベーション、世界の持続可能な開発に向けた日本の貢献をアピールするものとなった。会場を回った印象では、多数の各国パビリオンの中でも、中身の濃い、充実した内容の展示であったと思われる。

入口には、日の丸に緑の葉っぱをモチーフにしたグリーンイノベーションを象徴化したデザインのロゴが大きく描かれた。右上方向に伸びていく緑のラインで、力強い日本の復興への希望と、その先にある世界への展望を表すものという。日本パビリオンのコンセプトは、東日本大震災と津波により大きな被害を受けた日本が、以前の状態に戻る単なる「復旧」ではなく、これを機に持続可能な社会へと「復興」していこ

うという機運の高まりに応えるには、グリーンイノベーションが大きな力になるはずであり、鍵となる環境技術や省エネ技術は、まさに日本が世界をリードしてきた分野であるということにあるされる。

関心呼んだ「自然との共生」、「環境未来都市」、「環境技術」などの展示

展示ブースは 23 あり、その中で、多くの出展がおこなわれたので、そのすべてを紹介することは不可能だが、筆者の印象に残った展示の一部を紹介したい。自然資本の維持活用をテーマとしたゾーンでは、環境省が「さとやまイニシヤティブ」を世界 16 の事例に基づいて紹介、温室効果ガス観測技術衛星「いぶき」に関する展示を行い、農林水産省は、「自然からの贈り物―皆で守り活かす森・里・海」をテーマにした展示を行った。味の素は先端的バイオサイクルを導入したブラジルでの事例をはじめ、「食の未来」を作る取り組みを、フルッタフルッタ社はブラジルの熱帯雨林を舞台にした生産者とパートナーシップを組んで進めているアグロフォレストリー農法の紹介を行った。

地方自治体の環境未来都市への取り組みに関する展示も関心呼んだ。東京都は、世界初の都市型キャップ&トレード制度やグリーンビルディングプログラムと東京の低炭素ビル TOP30 を紹介、横浜市は、「未来都市よこはま」の取り組みを、北九州市は、北九州エコタウン、北九州環境パスポート（カンパス）、北九州エコ

ライフステージを始めとする革新的イニシアティブを展示し、内閣府が 11 の都市の未来都市に向けた取り組みを紹介した。

環境技術のゾーンには、多数の企業が参加し、たとえば、三菱商事が、電気自動車を変える新しい暮らしを「i-MiEV」を使って説明、東芝は、スマートコミュニティ、IHI は海流発電、洋上風力発電、海洋温度差発電など先端再生可能エネルギー、パナソニックは、創エネ、蓄エネ、省エネを繋ぐシステムや、サステナブルスマートタウンを、戸田建設は、50 の環境技術を組み合わせた環境最先端ビルを紹介した。

「世界への貢献」ゾーンの 3 つのブースのうち、JICA のブースでは、高倉式コンポスト、自動車リサイクル、環境教育教材や森林保全の活動が紹介された。高倉式コンポストは、北九州市や関連団体が行ってきた有機廃棄物のコンポスト化の技術であり、自動車リサイクルは、北陸の会宝産業が主導してきた自動車リサイクルシステムによる、自動車静脈産業による循環型社会の実現を目指すもので、いずれも、革新的試みとして注目される。それらを通じての国際協力に JICA も貢献してきている。

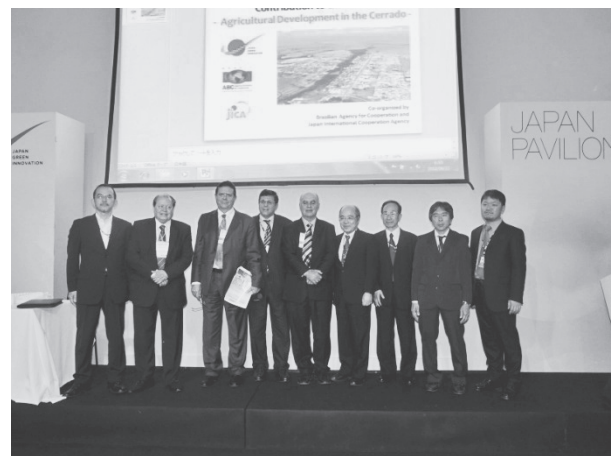
以上の他、日本パビリオンの展示スペースでは、震災の教訓、研究・観測・人づくりのゾーンが設けられた。

「持続的開発への教訓と世界への貢献：ブラジル・セラード農業開発」セミナー

また、展示スペースのほか、「多目的スペース」がパビリオン内に設けられた。ここで多くのサイドイベントが行われたが、日本とブラジルの協力の成果を紹介するセミナーとして、ブラジル協力庁（ABC）と JICA 研究所の共催で、「持続的開発への教訓と世界への貢献：ブラジル・セラード農業開発」と題するセミナーが行われ

た。

堀江正彦地球環境問題担当大使は開会の挨拶で、日本が行ってきた ODA の貴重な例として、セラード農業開発を紹介、また、ABC のマルコ・ファラーニ長官による挨拶では、「リオ+20 で、日伯セラード農業開発協力の成功事例を紹介することは時宜を得ている。ブラジル政府の対アフリカ援助強化方針の中で、農業開発はその主要な柱ともなっていることから、セラード開発の経験をもとにモザンビークで進めている日伯モ・三角協力による熱帯サバンナ農業開発（ProSAVANA-JBM）においても、誠実な援助機関である JICA とともに協働できることは喜ばしく、この事業を通じて、ブラジルは国際協力分野の経験を積むことができる」と述べた。



本セミナーでは、セラード開発に直接携わってきた関係者の生の声が紹介され、「持続的な開発と環境への配慮」をキーワードとする今後の開発援助のあり方が議論された。セミナー前半のセッション 1 では、セラード農業開発における日伯セラード農業開発協力事業(PRODECER)の役割について、ブラジル農牧研究公社

（EMBRAPA）淡水養殖研究所長（元 EMBRAPA 総裁）のカルロス・マグノ氏が説明し、カンボ社社長のエミリアーノ・ボテーリョ氏が、PRODECER 成功の要因分析、世界の食

糧増産への貢献、またブラジルにおけるバリューチェーンの創出を通じた地域格差是正への貢献などについて述べた。

セッション 2 では、セラード開発と環境保全について、ブラジル環境・再生可能資源院

(IBAMA) モニタリング部長のエドソン・サノ氏、ジャラポン地域生態系コリドープロジェクト・チーフアドバイザーの浅野剛史氏よりそれぞれ発表が行われ、両氏はセラードの環境保全に関する取り組みの例として、衛星画像を使用した違法伐採の監視システム、また生態系コリドーの導入による地域生態系の保全など、適切な環境保護への取り組みがセラード開発に組み込まれていることに加え、ブラジルの努力とそれを支える日本により、環境へのリスクが最小化されてきたことにも言及した。



本郷豊客員専門員（左）と細野昭雄所長（中）、ホセ・パシェコ農業大臣（右）

セミナーの翌日には、本件サイドイベントに高い関心を持っていたモザンビーク農業大臣のホセ・パシェコ氏との会談が行われ、セラード農業開発に関する英文報告書が手渡された。大臣からは、受け取った報告書を ProSAVANA・JBM 関係者で共有したいとの謝意が表明された。

結びに代えて

多岐にわたる日本パビリオンに関する紹介を、限られた紙数で行うのは到底不可能であるが、ここでは、印象に残った展示などについて紹介するとともに、日伯の協力事業として進められたセラード農業開発に関するセミナーについて紹介した。東日本大震災から 1 年余り後に行われるというタイミングであり、震災後からの復興と世界の持続可能な開発に向けた日本の貢献をアピールするという、日本パビリオンの狙いはかなり達成されたのではないだろうか。6 月 20 日には、ジャパンデーのイベントが、「東北大震災からの復興・教訓：持続可能な開発の観点から」をテーマとして日本パビリオンで開催された。

（ほその あきお ラテンアメリカ協会副会長、JICA 研究所所長）

〔ラテンアメリカ図書案内〕

『ブラジル 跳躍の軌跡』

堀坂 浩太郎 岩波書店（新書） 2012 年 8 月 218 頁 800 円＋税

1980 年代半ば、21 年間に及んだ軍事政権から文民政権に移行したものの、ハイパーインフレや対外債務危機で経済危機に陥り混迷していたブラジルが、今は「新興国」の雄ともて囃され、BRICS の中でも最も政治リスクの小さい国として評価されている。

1964 年の軍事政権の発足とテクノクラートに主導された経済発展と破綻による軍部の退出、80 年代から 90 年代前半にかけての文民政権時代の政治混乱と経済危機を経て、中道左派のカルドゾ政権によりインフレを克服して現在の成長軌道の基礎を作ったが、その後継政権が左派労働者党ルーラ大統領であったにもかかわらず、財政政策、対外経済関係は維持され、著しい経済発展を実現して 2 期 8 年の最後まで高い支持率のまま任期を終え、その政権を支えてきたジルマ・ルセフ女性大統領が継承して好調を維持している。その背景には、民政移管当時から国のかたち、選挙制度、文民統制、民営化、外資導入や金融安定化システムの構築、政府・企業・市民社会の協働。貧困克服策の実施、教育改革等の制度設計改革が積み重ねられてきたことを指摘している。さらに姿を変えた資源大国として、国際プレゼンスが高まり、国際化が進展するブラジルの現在を生き生きと描き、終章で遠くとも近い国にと日本・ブラジルの重層的関係と相互補完関係を越えた新たな結合を提起している。

本書は 1978 年からの日本経済新聞サンパウロ特派員から上智大学に転じ、一貫してブラジル政経を研究してきた著者が、この四半世紀に民主化、債務国から債権国への転換、1995 年以来 3 代にわたる大統領の下で劇的な変化を遂げた発展の軌跡を、政治、経済、社会そして対外関係から分析し、分かりやすく解説したもので、変容著しい現在のブラジルを正確に理解するために、コンパクトながら核心をもれなく明らかにした優れた手引きである。

〔桜井 敏浩〕

『ロマンに生きてもいいじゃないか メキシコ古代文明に魅せられて』

杉山 三郎 風媒社 2012 年 1 月 250 頁 1,700 円＋税

著者はメキシコで古代文明の遺跡発掘調査を長年続け、近年目覚ましい成果を上げて注目を集めている考古学者。幾多の困難を乗り越えてメソアメリカ文明の遺跡調査に参加し、米国の大学で人類学の学位を取り、アステカ文明のテンプロ・マヨール（メキシコ市中心部）の発掘に参加し、テオティワカン月の月のピラミッド調査を経て、ついに太陽のピラミッドでのトンネル調査により、内部から建設時期の多重さを立証するに至る半生記。

メキシコ古代文明の制度、仕組み、思想や都市計画についての解説はもとより、米国と日本との教育システムの違いや世界遺産を切り口にしたメキシコの魅力などについての著者の考えが随所に披瀝され、単に自伝に留まらない著者の情熱的な生き様を感じさせる。

〔桜井 敏浩〕